

# 都市の歴史社会学と都市社会学の学問構造

藤田弘夫

## 概要

日本の社会学者は都市社会学者にかぎらず、何よりも「現代」社会の研究者であることに意義を見出してきた。したがって、都市の歴史社会的な研究は多くはなかった。もっとも、これも都市の定義や歴史社会学をどう考えるかでかなりの違いがある。日本は都市社会学をアメリカから導入した。アメリカの都市社会学はアメリカ社会の非歴史的性格を反映して、歴史への関心が欠如している。このため日本の都市社会学は最近までほとんど歴史に関心を持ってこなかった。

現在、都市社会学者は歴史家の研究に影響を受けながら研究を進めている。これに対して、都市社会学者の歴史家への影響は少ない。矢崎武夫の統合機関理論による日本都市の発展史、中川清の生活構造論による近代化論、藤田弘夫の権力論による都市の発生論や飢餓論などわずかしかない。とはいえ、最近の佐藤香の社会的移動論、中筋直哉の身体の本源的対他相関性論などにもとづく研究は、新しい歴史社会的な研究の可能性を拓いている。この意味では、都市の歴史社会的な研究はようやく、はじまったばかりである。

## キーワード

7つの都市の概念、二つの都市社会学研究、シヴィック・ソシオロジー、L.マンフォード、奥井復太郎

## 1. 都市の歴史社会学とは

近年、歴史社会学を名乗る研究が着目を集めている。社会学の研究は最新の現象を扱うことが特徴だただけに、研究の新しい動きを感じる。ヨーロッパでは、社会学は程度の差はあれ、歴史性を持って語られてきた。M. ウェーバーをはじめ多くの学者が歴史社会学の研究を進めた。イギリスでは歴史社会学 (Historical Sociology) のタイトルをもつジャーナルが刊行されている。

これに対して、アメリカの社会学は歴史の浅い国だけに、歴史的関心をもつ研究者は少なかった。それでも、G. ホーマンズやC. ティリーなどの歴史社会学的研究が知られていた。とくにG. ホーマンズの中世イギリスの農村の研究は歴史家の間で高く評価されてきた。ところで、日本では、社会学はアメリカ以上に、「現代」社会の社会学だったのである。社会学者は新しさを競った。歴史社会学は農村や家族においては盛んに研究が進められたが、研究成果の割には地味な分野となっていた。

都市の歴史社会学研究は目立った研究分野ではなかった。だが、欧米では、都市の歴史社会学的研究が多様なかたちで進められていた。ヨーロッパでは早くからW. ゾンバルト、M. ウェーバーによって都市の歴史社会学的研究が進められてきた。また、アメリカでは、L. マンフォード、G. ショーバークなどが都市の歴史学的研究を進めてきた。日本でも、柳田國男が都市の社会的側面を抉り出す研究を進めてきたばかりか、奥井復太郎、矢崎武夫など都市社会学者が研究を蓄積させてきた。

とはいえ、実際には都市の歴史社会学的知識を蓄積させてきたのは、歴史家であったといっても過言ではないだろう。それに加えて、地理学者、建築史家、都市計画家なども事実上、都市の歴史社会的考察を行っている。したがって、都市の歴史社会学の状況については、多様な都市の歴史的研究のどこまでを、都市の歴史社会学の研究と考えるかであろう。歴史学者の都市研究に歴史社会学の名前を与える例もしばしば見られるが、それでは都市の歴史社会学的研究は際限なく広がってしまう。そうしたことを避けるには、都市の概念規定とともに、歴史社会学の概念をどのように考えるかが、大きな問題となってくる。ここでは、社会学者による自覚的な都市の歴史的研究を俎上に乗せることとする。それでも、都市の歴史社会学的な研究は実に多様な形態で展開されている。このため都市の歴史社会学的な研究に関しては、研究の〈内包〉と〈外延〉をどのように考えるかにかかっている。その際、問題としなければならないのが、都市概念の多様性であり、また都市社会学の学問としての認識論的構造に関する問題である。

## II. 都市の概念と都市研究の二重性

### 1. 7つの都市概念

都市という言葉は多様な意味で使われている。ひとりの研究者においても、都市という言葉は複数の意味で使っているのが普通である。ここでは、都市研究につきまとう曖昧さと混乱を可能なかぎり避けるために、都市の概念を7つに類型化したい。

まず、第一は、「人口の集積地としての都市」概念である。都市が人口の集積地であることを疑う人はいないだろう。都市とは、多くの人口が高い密度をもって集まっているところである。これは都市のもっとも基本的な命題をなす。第二は「機関の所在地としての都市」概念である。では、なぜ、大規模に人口の密集する都市と呼ばれるような場所が生み出されたのだろうか。それを社会の組織の拠点としてとらえたのが、都市機関論である。奥井復太郎の空間的交通網における「結節的機能」説、鈴木栄太郎の社会的交流の「結節機関」説、矢崎武夫の「統合機関」説などが、それである。

第三は「施設としての都市」概念である。人間は生活のための施設を必要とする。大量の人間が密集する都市は、住宅をはじめさまざまな建造物の集中するところとなっている。人がまず、都市を認識するのも、建造物の密集する物的施設としての都市の側面である。L. マンフォードの表現でいうと、「容器としての都市」の側面である。M. ウェーバーは、すべての都市に共通していることは、ともかく一つのまとまった定住であり、散在的住居ではないということのみだという。L. ワースの都市の定義にも、人口の規定のすぐ後に永続的「集落」の規定が置かれている。

表1 都市社会学者と都市概念

研究者 都市概念	ジンメル	ウェーバー	パーク	ワース	マンフォード	柳田	奥井	磯村
人口		○	○	◎			○	
機関							◎	
施設		○		○	○			○
自治体		◎						
社会関係 心理状況	◎		◎	○	○	○		◎
地域社会			○					○
文化				○	◎	◎		

著名な都市研究者が、都市の都市たる理由をどこに置いているのか、強くアクセントを置いている点を◎で、これに次ぐ側面を○で表示した。

出典：藤田弘夫・吉原直樹編『都市社会学』有斐閣、1999年、12頁。

第四は「自治体としての都市」概念である。日本で都市の自治を理解することは難しい。なぜなら、日本の都市は歴史的に「自治」をもっていなかったからである。西洋では「市民なき都市は、真の都市にあらず」とのことわざがあるように、都市と自治は不可分のものであった。M. ウェーバーが、行政的見地からすると、そもそも日本に都市があったかどうかを疑問視することができるというのも、このためである。現在の都市の自治は明治以降、西洋から学んだものである。日本の自治は都市の個性を主張するというより、国家の下部機関としての性格を強くもっている。日本の「自治」は、3割自治といわれてきた。地方自治を否定するような水戸黄門のドラマに喝采する日本人にとって、自治の問題は一

番理解のむずかしい点である。

第五は「社会関係と心理状況としての都市」概念である。大規模な人口の密集は、人々の人間関係や心理に影響を与える。都市では、多くの人と日常的に接触する。したがって、都市での社会関係は勢い「一時的」「多面的」「間接的」「匿名的」なものにならざるを得ない。M. ウェーバーは、都市の社会学的基礎が、住民相互間の人的な《相職関係》の欠如にあるという。人々が密集し統合機関がさまざまな活動を繰り返す都市では、人々の精神は日常的に緊張を強いられる。G. ジンメルは都市のこうした精神的側面を鋭く描いてきた。都会人の〈革新的〉で〈開放的〉な性格は、こうしたなかで培われる。これに対して、農村の社会関係は「永続的」「包括的」「直接的」「個別的」である。このため農民の心理も〈保守的〉で〈閉鎖的〉である。都市は社会関係の側面のみならず、心理状況の側面でも、農村とは異なっている。

第六は「地域社会としての都市」概念である。都市は人々の生活の場である..とくに住民生活は近隣との関係で、大きく変わって行く。近隣社会のありかたは、住民の生活を大きく規定する。この点に着目するのが、地域社会としての都市である。近隣とのつき合いは、こども会や老人会、祭祀組織、各種のボランティア団体、自治会・町内会などや、公園、学校、病院、福祉施設などの利用をめぐる広がっている。住民生活は地域社会のあり方を大きく規定する。こうしたとらえ方は、コミュニティ論として活発に議論されている。

第七は「文化としての都市」概念である。都市は何よりも「文化の拠点」である。都市はH. ルフェーブルの指摘するように、あらゆる富を引き入れ、権力が集中するように、「文化の独占」をする必要がある。L. マンフォードは、都市が建造物の集合であるより、むしろ、相互に関係し、たえず作用しあう機能の集合体—力の集中化だけでなく、文化の磁極化なのだ、と主張する。柳田國男も、都市が存続できるのは、新しい文化を生み出すことによってであることを強調する。都市はまたC. フィッシャーの指摘するように、さまざまなサブ・カルチャー（下位文化）を生み出す場所なのである。都市概念はこの7つの「理念型」のいくつかにアクセントを置いて構成されている。研究者がどのように都市の概念を構成するのかは、M. ウェーバーに即していえば、都市概念にどのような〈索出的〉意味を持たせるかである。

## 2. 都市研究の「二面性」と都市社会学研究の拡散

都市社会学には都市概念の問題もさることながら、研究を曖昧にさせる認識論的な問題がある。すべての社会現象は地表を舞台として発生する。地表は都市か農村に分けられる。

その意味ではどのような社会研究も、都市か農村のいずれかの研究だといえなくもない。しかしそれは社会学の研究ではあったとしても、都市社会学の研究ではない。都市社会学の研究というからには、分析の焦点を何らかの形で〈都市性〉に置くものでなければならない。

こうして見ると、都市の社会現象には、社会的に二つの違った分析方法があることがわかる。ひとつは社会現象を都市（人口の集積した集落、コミュニティなど）との関連で分析する研究である。いわば狭義の都市の社会的な研究である。もうひとつは、都市をたんなる社会現象の舞台として考えるやり方である。いわば広義の都市の社会的な研究である。つまり都市の社会的な研究は二種類の意味で可能なのである。地域研究の「二面性」とか、都市研究の「二面性」といわれる事態がそこにある。この認識論上の問題は、都市研究を理論的に展開しようとする時には、絶えず頭をもたげてくるのである<sup>1)</sup>。

1920年代のシカゴで活躍したR.E. パーク、E.W. バージェスの都市研究は、その後、アメリカの都市社会学を方向づけるとともに、今日語られる多産な成果を生み出した。ところが、アメリカでの都市社会学は、1950年代後半には、それまで都市の特徴をなす社会現象とされてきたものが、都市（人口の集積した集落、コミュニティなど）とは別の枠組みで研究されるようになったのである。都市の社会現象は都市の研究というより、家族、ライフサイクル、ネットワーク、エスニシティ、階級・階層、産業などの研究へと直接つながるものとなっていった。

都市社会学はアメリカで、1950年代後半から1960年代のはじめには、完全に行きづまってしまう。このことについて、D. マーチンデールは「人は都市についてのテキストのなかに都市自体を創造している原理以外のものは、すべてのものを見出すことができるだろう」という逆説的なことばで表現した（Martindale, 1958: 11）。都市研究は拡散していったのである。A.J. リースやD. ボーグなどシカゴ学派の都市研究を担ってきた名だたる学者もこのことを指摘し、都市社会学の黄昏がいわれた。

従来都市という枠組みで研究されてきたことが、家族、ライフサイクル、産業、階級・階層などといった別の枠組みのもとに研究されるようになっていたのである（Gans, 1968: 74）。このことは日本でも議論された。高橋勇悦のことばでいえば、都市社会学は第二次世界大戦後「理論的破産」という成果を生み出したのである（高橋, 1975）。

この点では、マルクス主義の都市研究においても同様の問題を抱えていた。マルクス主

1) イスラムの都市性が重点領域研究となった巨大なプロジェクトがあった。そこでの都市研究を通して、難題のひとつとされたのが、都市の問題として提起した議論が研究を進めていくうちに、いつのまにか都市との関連を喪失してしまうことであった。藤田弘夫, 1993, 「書評論文 羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究』」東京大学出版会 1991年刊 日本中東学会編『日本中東学会年報』第7号。

義の研究がいかにか資本の論理を重視するといっても、都市＝資本ではない。もっともこの問題も地域の調査や具体的な問題のレベルでは、あまり問題とはならない。しかし研究を理論化しようとする、深刻な問題として浮かび上がってくるのである。都市が資本の運動に解消してしまいかねなかった。そうした事態を打開しようとして登場したのが、新都市社会学である。1970年代末から新都市社会学が狭義のマルクス主義者を越えて広く受け入れられていったのも、こうした土壌があったからである。M. カステルの「集合消費」やD. ハーヴェイの「建造環境」などが新しい焦点とされた。

### III. 都市概念の普遍性と歴史性

#### 1. 都市の普遍性と歴史性

奥井復太郎が1940年に発表した『現代大都市論』は、わが国の都市社会学の出発を飾るにふさわしい書であった。奥井はそのなかで、都市研究についてバビロン、アレキサンドリア、アテネ、スパルタ、ローマも都市ならば、ニューヨークも同じ都市である、しかしこれらを同列に扱うことは出来ないと主張する。かれは、都市社会学は少なくとも現代都市に関するかぎり、今日の大都市の構成、発展、推移を現在の社会的約束のなかに求めなければならないとする。そして、今日、都市とは資本主義社会の中枢を形成する地域社会であると対象を限定しなければならないとして、都市社会学は資本主義社会についての社会学という意味で資本主義社会学の一部であると主張する（奥井、1940：45）。

マルクスは資本制社会の構造分析を求めた。マルクスの社会理論は、二つのレベルで理論を区別している。マルクスは歴史貫通的、通文化的概念として、土台（生産諸力と生産諸関係）と上部構築物という〈普遍理論〉を定式化する。かれはそれを、経済的社会構成の観点から、古代奴隷制社会、中世封建制、近代ブルジョワ社会への移行を〈歴史理論〉として位置づける。マルクスは中世が封建制度による古代「都市の農村化」であるのに対して、近代が資本主義による中世「農村の都市化」であるという。マルクス主義の都市研究は近代をさらに資本主義の諸段階に区分して研究を進めてきた。

藤田もまた『都市と権力－飢餓と飽食の歴史社会学－』（1991）で、都市を権力との関連で分析する上で、二つのレベルで理論を区分している<sup>2)</sup>。都市を権力との関連で分析することは、都市が性格を異にする〈二つの側面〉をもつことを意味する。その第一は、都市は人間が社会生活を営むなかで必然的に生み出される権力によって構成されたものであるため、都市は歴史や文化の違いを越えて存在していることである。ここに都市が〈歴史

貫通的)〈通文化的)な論理をもつ理由がある。都市はいつの時代、どこにでも形成されるのである。都市の存在はエリコやチャタル・フユクなどの新石器時代にまでさかのぼるのである。さらに農業の普及とともにアフリカ、新大陸などに出現したのである。都市の第一の普遍概念とも言うべきものである。この点に着目して、都市は「通時的」にも「共時的」にも、理論化が可能である。

第二に、しかし、それでいて、都市が「歴史」や「文化」を離れては論じられないのもまた、都市が権力によって構成されたものであるという、その同じ事実のなかにある。権力のあり方は、歴史や文化によって実に多様な形態をもつものとなっている。その形態の〈具体性〉を無視して、現実の都市を語ることは出来ないのである。都市の第二の歴史理論とも言うべきものである。都市の研究はあくまで、都市の歴史的、文化的な具体相に沿って分析されるべきである。その際、あまり大きな枠組みは分析の有効性を高められない。古代ローマにも現代都市にも、文化の退廃があるとしてもそれは都市の認識論的な問題(認識根拠)にはなりえても、現実の問題(実在根拠)を説明する枠組にはなり得ない。

## 2. 都市社会学における歴史的視点の欠落の理由

日本の都市社会学における歴史的視点の欠如はどこからきたのだろうか。都市社会学はイギリスでゲデス(P. Geddes)によってCivic Sociologyとして開始された。ゲデスの都市研究は社会学研究の盛んであったアメリカでも注目を集めた。ゲデスはシカゴの都市社会学やL. マンフォードの都市研究に大きな影響を与えた(Geddes, 1905=2005, 1915)。しかしシカゴはP. パークやE. W. バージェスの人間生態学(Human Ecology)にもとづくUrban Sociologyの提唱によって新しい時代を迎えることになる。

急速に発展するアメリカの都市は、歴史性がきわめて希薄である。したがって、アメリカには都市の歴史社会学がない。このことは、何よりもアメリカ社会を反映したものである。そのことは、W.I. トマスが、イギリスの社会学会で報告されたP. ゲデスの1905年の「都市学—応用社会学の試み」に寄せた感想で、アメリカの都市では、事情が異なることを指摘していることに表れている。トマスはその理由を、アメリカの都市がヨーロッパのような緩慢な歴史の流れのなかで出来たというより、急速な人口移動によって出来たことをあげている(Geddes, 1905=2005: 75)。

2) 『都市と権力—飢餓と飽食の歴史社会学—』(創文社 1991年)はこの議論を全面的に展開したものである。『飢餓・都市・文化』(柏書房 1993年)はこの議論について、歴史家と対談したものである。『都市の論理』(中公新書 1993年)は、この問題を一般向けに書いたものがある。さらに『人間はなぜ都市をつくるのか』(ポプラ社 1994年)は、この議論を中高生向けに書いたものである。

P. ゲデスの影響を受けたL. マンフォードはパークやバージェスなどが都市の〈歴史〉や〈地理〉を十分に理解しないままに研究を進めていると批判する。これに対して、パーク、バージェスなどはシカゴでP. ゲデスの影響を受けたC. ゼプリンの研究に触れようとはしなかったし、L. マンフォードの都市の歴史社会学的研究にいたっては、社会学の視野の外に置き無関心を装った。その後、G. ショーバークはシカゴ学派のアメリカ社会中心主義を反省する「比較都市社会学」を提唱する。そこでは、近代都市とは異なる「前産業型都市類型」を提唱し、歴史的視点を導入しようとしたものである。しかしこうした主張も、アメリカの都市社会学の拡散とともに、顧みられなくなった。

日本の都市社会学における歴史的関心の欠如の一因は、都市社会学がイギリスではなくシカゴから輸入されたことが深くかかわっている。日本の都市社会学者は繰り返しシカゴ学派の都市研究の意義を強調した。したがって、都市研究はつねに「現代」社会の研究であった。その際、ゲデス、マンフォード、ショーバークなど都市の歴史的側面に関心をもつ研究は継承されなかった。日本の社会学者にとって、都市の歴史的側面を研究の正面に据えて議論される機会はなかったといっても過言ではない<sup>3)</sup>。

## IV 歴史社会学の構造と都市の歴史社会学研究

### 1. 歴史哲学と歴史社会学

都市の歴史社会学において、そもそも歴史と社会学はどうかかわるのであろうか。歴史社会学という以上、歴史社会学は社会学の分野に属する研究である。社会学を学問的基礎として進められる歴史研究という意味であろう。したがって、歴史社会学は当然、歴史研究とは異なっている。歴史社会学が社会学を基礎として、進められる歴史研究であるとするなら、歴史学は何を基礎として、研究が進められるのであろうか。近代歴史学はL. v. ランケに象徴されているように、厳密は史料批判によって確立した。歴史研究には「史料をして語らしむ」という公平無私な視点が要求された。

史料は直接、間接に無限にある。したがって、歴史の叙述には史料の選択が必要である。そこに歴史哲学、歴史理論の必要性がある。己れを消し去って事実語らせるとしたラン

3) アメリカ社会の歴史性の欠如は、社会学の学問的性格に大きな影響を与えている。たとえば、アメリカの農村には旧大陸の農村のような歴史はない。アメリカで歴史をもっている村落を探すとすれば、それはインディアンの村落である。このことについて、鈴木栄太郎は「日本農村社会学の米国におけるもっとも近縁の学問は米国農村社会学ではなくむしろ社会人類学である」というのである(鈴木, 1970: 334)。



ケも現在から見ると、かれは王政主義者であり、ナショナリストであり、プロイセン主義者であり、勢力均衡論者である。歴史研究は歴史家の自覚の有無にかかわらず、「歴史観」なしには研究を進めることは出来ない。歴史理論はランケ流の過去の事実の「発見理論」から過去の事実の現在の時点での「構成理論」へと変化している。B. クローチェのいうように「あらゆる歴史は現代の歴史である」し、R.G. コリングウッドのいうように、歴史は「歴史家による過去の人間の行為の再行為」なのである。歴史は社会学者がしばしば抱きがちな単純な過去の出来事の研究ではない。

ともあれ、歴史の研究は歴史家自身の自覚の有無を別にして、何らかの、歴史哲学、歴史理論を前提として成立している。歴史社会学はこの歴史学にとっての歴史哲学・歴史理論のところに、社会学の概念図式や理論が置かれているものなのだろう。つまり歴史社会学は歴史に対する社会学の概念図式や社会学理論を強く意識した研究なのである。では、社会学者はどのような態度で、都市の歴史社会学研究を進めたのであろうか。

## 2. 都市の歴史社会研究一(1)

都市の歴史社会学的研究を語るうえで無視できない役割を果たしているのが、柳田國男の研究である。一般に民俗学の研究とされる柳田の研究は多方面で、都市の歴史社会学と接点をもっている。柳田の民俗学を日常の繰り返しのなかで変化する〈一回性〉のない歴史学だととらえた中井信彦は、柳田の都市論を柳田史学の隅のかなめ石だとする（中井、1973：137）。柳田は明治末の横井時敬などの「都市化論争」に参加して以来、断続的に都市を論じている。かれの都市を農村との連続性からとらえる方法は、日本の都市の特質を見事に俯瞰させている。柳田が都市の歴史社会学の理論ともいべき見解を発表したのは、大正の末であった。

柳田國男は都市が農村に対して優位を保ち得るのは、新しい「文化」によってであると主張する。しかも中央の都市の文化は、絶えず外国の文化を摂取することによって充実し、維持されるものになっている。そして「この理法は洋の東西を問わない」ものなのである。この点を手掛りとして、柳田は独自の《都市—農村》関係の理論を展開する。

中央の都市が、新しき芸術、宗教、製造品等の新知識をもって地方に臨むとき、中央の都市の立場はきわめて強いものとなる。この「法則」を、わが国の政治史にあてはめると、政治の重心の移動は“中央の都市と地方”の間で〈波形の線〉を描き出す。大化の改新が行われたのは、中国の文化が日本に輸入されていた都市中心の時代であった。これに続く王朝の時代は、中国文化の輸入が跡絶え、荘園が権力の基盤となるとともに、地方の武力が旺盛となった。外国文明の輸入が絶え、消費生産の経済状態が国内に限られる時、生産

者の大部分を占める農家の生産が、総ての基調をなすにいたるのである。新鮮の気を失った中央都市の文化は、もう既に、頑健にして鈍重な地方を惹きつけることは出来ない。かつて絢爛たる文化をもって地方を支配した都市は、今や、農民が生産した米によって支配されるのである。明治維新の原動力もまた地方にあった。江戸時代末期に、幕府が急速に開国へと転換していくのは、倒れかかった幕府権力を、外国の文化の導入によって支えようとしたためだった<sup>4)</sup> (柳田, 1970: 6)。

明治維新以降、新しい中央集権がはじまった。明治政府の政策は、都市を保護するものでなければならなかった。政府は都市中心の政策をもって地方に臨んだのであった。その結果、現在の東京人の外国文化の導入には、凄まじいものがある。最近の文化的流行、製造品は、決して東京が生み出したものではなく、ほとんどは欧米諸国からの輸入品である。柳田はこうした観点から、第一次世界大戦後にはじまる深刻な不景気に対して、この原因を単に工業の不振、貿易上の輸入超過と見るべきではなく、中央の都市が無制限に、地方を搾取した結果だと主張する (藤田, 1982: 132)。

日本における都市社会学の創立者となったのが、奥井復太郎である。奥井には「明治東京の性格」や「荷風と東京——都市社会学から見た荷風の作品——」といったユニークな論文がある。しかしかれが都市の歴史社会学的研究を行ったわけではない。かれはイギリスとドイツの都市研究の上にシカゴ学派の都市研究を加え、独自の都市理論を構築した。その核となったのが都市を、空間的交通網における「結節的機能」という概念でとらえたことだった。この説はその後、鈴木栄太郎によって都市を、社会的交流の「結節機関」とする説に継承された。この説は矢崎武夫によって、さらに「統合機関」説に発展されることとなる。

矢崎武夫はシカゴ大学で都市社会学を学んだ。シカゴの都市研究には、都市の歴史的側面が欠如している。矢崎は帰国後、シカゴ学派の研究を踏まえて、都市を権力の基礎とした「統合機関」理論を提唱する。かれはアメリカの都市社会学を意識しながら、日本の都市を歴史的に遡る。矢崎の『日本都市の発展過程』(1962年)は、統合機関論を核として古代から近代にいたる日本の都市の展開をたどる。本書は英訳され海外に紹介されることとなる。

4) 柳田の政治の「都市—農村」移動論と類似した議論を展開しているのが、イブン・ハルドゥーン (Ibn Khaldun) である。かれは世界の歴史を都市と農村との間の王朝交代の反復としてとらえる。イブン・ハルドゥーンの歴史哲学は実質的に社会法則を意味しているとして、かれを最初の社会学者だとする見解も広く知られている。(Fuad Baali, *Society, State, and Urbanism*, State University of New York Press, 1988)

### 3. 都市の歴史社会研究一(2)

矢崎の統合機関理論を継承しながら、都市の歴史社会学を展開したのが、藤田弘夫である。古来、都市は不思議なところである。「古今東西、都市は食糧を生産しないにもかかわらず、農村より飢えない」のである。都市が農村よりも飢えるのは、戦時—それも敗戦時だけである。昔から農村に「飢え」はつきものであった。戦前まで農村の生活は飢餓と背中合わせだった。飢餓に見舞われた農村の悲惨な姿を伝える伝承は多い。わけても江戸時代の東北地方の農村は繰り返し深刻な不作に悩まされた。飢饉ともなれば、おびただしい餓死者を出した。東北の各地に飢饉の供養塔やおぞましい話が伝わっている。

だが、その時、都市はどうだったのかということについては、あまり触れられることがない。飢饉の時に、弘前、盛岡、仙台などの城下は、どうだったのだろうか。さらに大量の食糧を消費する江戸、大坂、京都といった大都市は、どうだったのだろうか。

もちろん、農村が凶作ともなれば、その影響は都市にも及んでいる。都市でも飢饉のたびに少なからず餓死者を出している。しかしそれでも、農村と比較すると、都市での餓死者の数は、はるかに少なかった。もし、餓死者があるなら、都市の方が農村よりはるかに史料として残りやすいのである。それどころか、都市での餓死者といわれている者も、よく調べてみると、飢餓に喘ぐ農村から来たらしい者が多いのである。かれらはやっとのことで都市に辿りついたものの、時すでに遅く餓死したのである。この点、都市に住む武士や上層の町人が餓死するという事は、まずなかった。もし、都市民で餓死する人がいるとすれば、それは飢饉がなくとも普段から飢えている都市の最下層民である。

このことは産業別就業人口比率からも窺える。一般的な常識とは逆に、食糧生産に関係の深い農業・林業・水産業など第一次産業に従事する人の多い国ほど、飢餓地帯を抱えていることが多いのである。これに対して、鉱工業やサービス業など第二次、第三次産業の比率の高い国では、飢餓人口ははるかに少なくなっている。アメリカ、カナダ、オーストラリアなど過剰な農産物に喘いでいるこれらの国の第一次産業への就業人口の比率は、そのほとんどが5%以下である。これに対して、第一次産業への就業人口の比率が50%を越えるようなアジア、アフリカ、ラテン・アメリカの諸国では、食糧の増産は一刻の猶予も許されない問題となっている。これらの国ではたとい飢餓にいたらないまでも、食糧の問題は緊急を要する問題となっている。

日本では、戦後の経済の高度成長とともに飢餓から解放されていった。その後は食糧自給率の著しい低下にもかかわらず、巷に食糧があふれるとともに、逆にコメの過剰生産に悩み続けるのである。藤田は「都市と農村の食糧事情のパラドックス」に権力の拠点とし

ての都市を見る。それをキイ概念として、都市社会のさまざまな側面に「理念型」を構成し、M. ウェーバーの「比較例証法」を踏襲することで、古今東西の事例に言及する。藤田は都市の〈理念型〉分析を通じて、人間の歴史の隠された側面を読み取ろうとする。

#### 4. 都市の歴史社会研究—(3)

中川清は『日本の都市下層』(1985)で、近代の都市形成期における住民を、詳細な資料を作成しながら下層社会として描き出す。生活変動を引き起こす大きな条件とは、近代という環境に他ならなかった。中川は生活の営みにとって、近代とは、目指すべき理念ではなく、それまでの生き方の変更を余儀なくされる新たな環境であったという。近代という環境は、都市への人口流入を次第に増加させ、そこで生き残り、世帯を形成することを可能にしたが、それは同時に、直系家族において無意識に繰り返されてきた抑制と排除を、はじめて意識の俎上へのせ、抑制と排除が解除可能であることを示したのである。中川は『日本都市の生活変動』(2000)で、中鉢正美の「生活構造論」の結論を組み替え発展させることによって、時系列的な実証分析との整合性を図りながら、19世紀末から21世紀にかけての近代日本の生活構造を描き出す。

表2 日本の生活変動仮説

時 期	生活変動の性格	制約と抑制・排除	生活から社会への構図	生活認識と言説
〈生活変動の初期条件〉				
～1870年代	(原型としての小農直系家族)	小農家族による抑制と排除		(外部からの認識)
～1890年代	近代への直面	抑制と排除の意識化とその解除可能性	社会の輪郭形成	異質性の発見
〈過剰対応——生活にとっての近代〉				
～1910年代	過剰反応	生活構造の緊張	生活課題の直接的な「外部化」	異質性の内部化
～1920年代	構造形成	社会階層という制約	生活課題「外部化」の社会的な回路形成	貧困概念への集約
～1940年代	構造抵抗	外部という制約	構造抵抗を媒介とした社会統合	同質化すべき貧困
〈自己変容——生活にとっての現代〉				
～1950年代	仮適応	中絶による大規模な自己限定	生活課題の「内部化」の開始	同質化の追求 = 貧困からの脱出
～1980年代	構造変動	抑制と排除の生活内部への組み込み	絶えざる「内部化」による「消費社会」の創出	生活状況から対応能力への転換 「本当の豊かさ」
1990年代～	自己変容	抑制と排除の結果としての自己変容	「自分の生涯像」の社会的主題化	同質化の不可能性 制約としての環境

中川清『日本都市の生活変動』7頁。

都市社会学の研究のひとつの焦点となってきたのが、地域集団である。そのなかで、町内会の歴史が問題となった。秋元律郎『戦争と民衆』（1974）は戦争中の町内会の研究でもあり、著者の町内会の体験でもあった。田中重好の「大都市における町内会の組織化」（1979）は東京における町内会の形成過程を、資料を作成しながら丹念に追いかけたものである。藤田弘夫『日本都市の社会的特質』（1982）は、町内会を日本の地方制度のなかに位置づけながら議論を展開する。吉原直樹は戦後のGHQによる町内会の禁止直後の町内会をめぐる動きを『戦後改革と地域住民組織』（1989）で描き出している。

京都には歴史が深い影を落としている。このため京都の研究には他の地域にもまして歴史研究を踏まえざるを得ない。佛教総合研究所編『成熟都市の研究—京都のくらしと町—』（1998）は、この点を顕在化させている。京都の町の研究で町内会の歴史的関連に触れることは不可欠である。高木正朗、安国良一、上田惟一などは岩崎信彦・鯉坂学他『町内会の研究』（1989）で、奈良や京都の地域組織の歴史を描き出している。玉野和志『近代日本都市化と町内会』（1993）は近代日本の都市を町内会に焦点を当てながら探ろうとするものである。また、玉野和志『東京のローカル・コミュニティー：あるの物語 1900-80』（2005）はこれまで描けなかった地域社会の歴史に、匿名性を手がかりとして踏み込もうとする新しい試みとなっている。

若林幹夫は都市を「二次的定住」としてとらえる。若林の二次的定住とは、社会の他の領域の存在を一時的な前提として、それらの間の交通関係の場として存在という、都市が他の領域にたいしてもつ位相を表現することばだという。都市が二次的定住であることの対として、都市がそれらに対して媒介的（＝二次的）な位相をとる社会の他の領域を、「一時的な位相にある社会」ないし「一時的領域」にある社会だというのである。若林幹夫は『熱い都市冷たい都市』（1993）で、独自の視点から、江戸から東京への移行について論じる。この立場は、『都市の比較社会学』（2000）でも踏襲されている。

近代都市は人びとの欲望の解放の場である。そのことは一面で、都市が多くの側面を隠し持つことを意味する。そこで、都市の隠された側面を解明しようとする試みがなされることとなる。佐藤健二編『都市の解読力』（1996）には、永井良和「『尾行』術の足跡——『個人』を把握するテクノロジー」、重信幸彦「水と黴菌——都市伝説」、内田隆三「まちづくりにとって調査とは何か」、「方法を読む——社会調査の水脈をたどりながら」などが収録されている。

どの社会でも、経済の成長過程では、産業化と都市化が進行する。産業化は在来産業から近代産業への労働力移動を、都市化は農村から都市への人口移動をともなう。その移動は、社会空間、あるいは物理的空間における伝統的セクターと近代的セクターの相互関係におけるダイナミズムとして考えることができる。

佐藤香『社会移動の歴史社会学：生業・職業・学校』（2004）は、このダイナミズムが時代とともにどのような変化を遂げてきたかをたどることによって、日本社会が経験してきた歴史的プロセスを、社会学的な一面から描き出すことが出来るはずだとする。つまり社会空間の移動と物理空間の移動がどのような関係にあるのかを明らかにする。

佐藤は伝統的セクターと近代的セクターを「生業の世界」と「職業の世界」として概念化する。そして1920-30年代の戦間期、移動が政策的にコントロールされた戦時中、そして戦後復興期から経済の高度成長期、成熟期を〈教育〉との関係をライト・モチーフとして明らかにする。佐藤は社会移動論をもって、これまで漠然と語られたり、個別事例として追求されてきた日本社会の断層を、大胆に描き出したといえる。

中筋直哉『群衆の居場所——都市騒乱の歴史社会学——』（2005）は、歴史形成の原動力を「(人間の)身体の本源的対他相関性」にもとめるとともに、独自の「群衆の社会理論」を構築する。中筋は明治、大正期の東京における空間的な群衆の居場所の形成過程を具体的に明らかにするとともに騒乱罪の成立経緯を明らかにする。中筋はこれらを踏まえて、日比谷焼き討ち事件、米騒動などの近代の都市騒擾に新しい意義を与えようとする。

中筋は群衆となった人びとが、かれらの生活に外部から与えられた新しい社会形態を、まず自らの身体をそこに投げ入れることによって体験し、次に集合的な破壊といった形で共通・統一的に意味づけ、さらに各自の生活の内側にある事実として分有していくなかで独自の主体性を持つようになることを主張する。それは個々人の観念のうちに否定から肯定へといった劇的な転換をともなう観念の技法だという。そして中筋はこの時期の群衆運動が、現代日本社会のもつ「自在な日常的交通」「国民国家への参画」「大衆消費文化の享受」などの歴史的先行条件のひとつとなっていることを主張する。中筋は明治、大正期の東京を舞台に民衆の騒擾を、独自の「身体の本源的対他相関性」が、部分的事実独自の動きについては長期の自己組織的な歴史形成と、それに介入する短期の歴史形成との偶然的複合として分析する方法を開陳する。中筋の研究がどこまで正鵠を得るかは今後の検討課題に委ねるとして、社会学理論を駆使した都市の歴史の研究である。

## V. 都市の歴史社会学の歴史学への影響と展望

### 1. 都市の歴史社会学への影響

都市社会学者は歴史家の整理した史料や研究書を資料として研究を進めている。歴史家の研究なくしては、都市の歴史社会学はないといっても過言ではない。その一方で、社会

学者の歴史家への影響は微々たるものでしかない。しかも中川清を除いて、多くは歴史研究の理論的側面に関してである。

中川清『都市の下層社会』（1985）の研究は各方面に影響を与えた。中川清の研究はさまざまな統計資料の作成をともなうものだけに、歴史家に画期的な資料の提供となった。いち早く歴史学の領域で影響を受けたのが、布川弘『神戸における都市「下層社会」の形成と構造』（1993）である。中川の研究は歴史学に大きな影響を与えるにいたっている。中川清の研究は歴史学のなかにしっかりと根を下ろしているといっても過言ではない。

藤田の権力理論にもとづく都市発生論は日本の古代史に刺激した。山尾幸久、都出比呂志、小路田泰直などの歴史家は、広瀬和雄編『都市と神殿の誕生』（1998）で、藤田の理論に対する位置づけや評価を広範に検討している。藤田の議論は広瀬和雄の「弥生都市論」を補強する研究ともなっている。中世考古学の前川要は住民の安全性の観点から、藤田の権力論に言及する。

藤木久志は『雑兵たちの戦場』（1995）で、戦国時代史をお決まりの戦国英雄の国取物語としてではなく、その原動力となっている雑兵たちの側から描き出す。藤木は戦争が雑兵たちにとって、サブスタンス経済となっていたとする画期的視点を打ち出した。藤木はさらに『飢餓と戦争の戦国を行く』（2001）で、藤田の都市が権力の拠点として豊かな食糧のなかにある側面に着目して、「応仁の乱」を人びとが地方から都へと食糧をもとめて駆け上がる過程として描き出している。藤木は藤田の仮説が日本の中世史研究に突きつけた課題のひとつであると指摘する（藤木，2001：59）。

藤田の飢餓に関する見解は、近世の飢餓に関して、安藤優一郎の天明の一揆や東島誠の公共性の問題に触れて、議論されている（東島：1993）。菊地勇夫は藤田の都市論に言及しながら東北地方の飢餓を『飢餓の社会史』（1994）、『近世の飢餓』（1997）で描き出した。

東洋史関係では、菊池英夫が藤田の権力論による都市の原理論構成の試みを、都市の比較史の共通項をいかに設定するか、また、真に中国固有の都市の特徴はどこに見出されるか、などについて示唆を与えるものであることを指摘している「中国・聚落史の動向と『城郷関係の問題』についての私的展望」（菊池，1992：45-48）。さらに伊原弘は藤田の研究を、中国史に潜在化している飢餓の問題に関して、都市の観点から自覚的に追及することに着目する「新たな中国都市研究の視点をめぐって」（伊原，1998）。

矢崎武夫の *Social Change and the City in Japan*, Japan Publishing Inc., Tokyo (1968) は、英語で書かれた日本の都市論として、F. ブローデルをはじめ歴史家に日本都市の資料を提供している（Braudel, 1979 = 1985 : 280）。矢崎の研究は英文の翻訳があることから、*Cambridge History of Japan* などと言及されるなど多くの読者を獲得している。しかし西洋史関係については、速水融の歴史人口学が大きな影響を与えたのに対して、社

会学者の研究の歴史家への影響は少ない。都市の歴史社会学は、速水融たちによる歴史人口学による都市化の Woude, AD van der, Akira Hayami, Jan de Vries, *Urbanization in History* (1990) のような成果を生み出すにはいたっていない。藤田の都市の発生論が、大津忠彦・常木晃・西秋良宏『西アジアの考古学』(1997) などに触れられるにとどまっている。

## 2. 都市の歴史社会学の展望

歴史認識の問題は広範な影響力をもっている。歴史は国民形成のイデオロギーであるだけに歴史教科書は検定制度の対象となっている。歴史認識の問題は韓国、中国をはじめ最近のアジア諸国と軋轢を起こしている。しかし歴史の知識は中学校・高等学校の科目としては残るが、大学の教養課程からは、消えている。これにともなって、歴史学は縮小している。大学における歴史がすでに初等中等教育で学習されているために歴史学は学生にとっても、新鮮さにかける科目となっている。また、歴史学がかつてのマルクス主義の唯物史観のように歴史の流れを法則化する理論図式をもたないために細分化された実証研究と化し、学生にとってリアリティのない学問となっている。

これに対して、社会学は高等学校にこの科目名がないこともあって、かえって魅力を増している。社会学は急速に大学の中にポストを獲得しつつある。これにともなって、社会学者のポストも急増している。また、社会学科の拡大や社会学部は内部に多様な社会学の領域を置くことを可能にした。社会学は長いあいだ「現代」の社会学であることを売物としてきたが、現代社会学とは対極的な歴史社会学の名称も不思議だと思われなくなったのである。今後、都市の歴史社会学は社会学的観点や社会学理論を手がかりとして、歴史学から膨大な成果を引き継ぎながら研究を進めることになるだろう。このことは、また、かつての魅力を失いつつある歴史学に、新たな刺激を与えることにもなる。社会学の研究は歴史学のこれまでの豊穡な成果に、あらたな光が投げかけられる。そのためにも、社会学者に期待されるのが、歴史的感覚と歴史学や歴史哲学についての、最低限の知識である。社会学者はとかく歴史学に、理論がないと考えがちである。しかし日本にも、中井信彦『歴史学的方法の基準』(1973) 年や佐藤正幸『歴史認識の時空』(2004) をはじめすぐれた歴史理論の研究がある。

都市の社会学理論として、藤田の権力論、若林の二次定住論、佐藤の社会的移動論、中筋の身体の本源的対他相関性などの理論は、さまざまな議論展開の糸口を与えている。とくに佐藤香の近代化に都市－農村の空間移動を、社会移動との関連でとらえる研究は期待される。この種の研究は中国をはじめとする途上国の都市化の国際比較研究への道を拓い



ている。この点で、速水融たちの人口の都市化の比較研究のような発展の可能性をもって  
いる。A. ギデンズは歴史家の仕事と社会学者の仕事が収斂していくことの重要性を指摘  
する。かれは歴史学がいつそう社会学的になり、社会学がいつそう歴史的になるべきだど  
いう。しかしそれにも増して、ギデンズは社会理論が時間と空間を取り戻すことによって、  
行為性 [エージェンシー]、構造、コンテクスト性が、歴史学と社会学の両者にとって、  
研究の焦点となることを強調する (Giddens, 1984: 363)。

日本には、L. マンフォードの『歴史の中の都市』やP. ホールの『明日の都市』のよ  
うな古典的な都市の歴史社会的成果がない。L. マンフォードの『歴史の中の都市』は  
刊行後半世紀近くになっているにもかかわらず、なお新鮮さを失わない。本書はきわめて大  
部の書籍であるにもかかわらず毎年のように版を重ね多くの読者を獲得している。また、  
P. ホールの『明日の都市』も、1988年の刊行後2002年には改定3訂版を重ね2003年に  
は年2度の印行を行っているほど読者を獲得している。

都市の歴史社会学的研究は、都市史の研究に新たな発展の途を示している。しかし都市  
の歴史社会学の研究に危惧されている点がないわけではない。冒頭に触れたように、都市  
の概念は多様である。これに社会学のあいまいさがあいまって、歴史社会学的研究への期  
待のあまり、内容に乏しい研究が氾濫することである。

## 参考文献

- 秋元律郎 (1989) 『都市社会学の源流』有斐閣。  
 秋元律郎 (2004) 『近代日本と社会学』学文社。  
 Baali, Fuad (1988) *Society, State, and Urbanism*, State University of New York Press.  
 Braudel, Fernand (1979) *Civilisation, matérielle, économie et capitalisme*, tome 1, Librairie Armand  
 Colin, Paris. (村上光彦他訳 (1985) 『文明・経済・資本主義』I-2 みすず書房)。  
 佛教総合研究所編 (1998) 『成熟都市の研究——京都の暮らしと町——』法律文化社。  
 藤木久志 (1995) 『雑兵たちの戦場』朝日新聞社。  
 藤木久志 (2001) 『飢餓と戦争の戦国を行く』朝日新聞社。  
 藤田弘夫 (1976) 「比較都市社会学と M. ウェーバーの都市論」『日本都市の社会的特質』時潮社。  
 藤田弘夫 (1982) 『日本都市の社会的特質』時潮社。  
 藤田弘夫 (1990) 『都市と国家——都市社会学を越えて——』ミネルヴァ書房。  
 藤田弘夫 (1990) 「都市社会学理論の方法論的基礎」『都市と国家——都市社会学を越えて』ミネルヴァ書房。  
 藤田弘夫 (1991) 『都市と権力——飢餓と飽食の歴史社会学——』創文社。  
 藤田弘夫 (1993) 「書評論文 羽田正・三浦徹編『イスラム都市研究』」東京大学出版会 1991年刊「日本中東学  
 会編『日本中東学会年報』第7号。  
 藤田弘夫 (1993) 「書評論文『21世紀の都市社会学』：二つの都市研究と都市社会学の理論的課題」日本社会学  
 会編『社会学評論』第48巻 第2号。  
 藤田弘夫 (1993) 『都市の論理』中公新書。  
 藤田弘夫編 (1993) 『飢餓・都市・文化』柏書房。  
 藤田弘夫 (1996) 「首都の比較史——日本史研究会50周年記念シンポジウム批判——」『日本史研究』日本史研  
 究会編 第406号。  
 藤田弘夫・吉原直樹編 (1999) 『都市社会学』有斐閣。

特集 歴史社会学

- 藤田弘夫 (2000) 『奥井復太郎——都市社会学と生活論の創立者——』東信堂。
- 藤田弘夫 (2003) 『都市と文明の社会学——環境・リスク・公共性——』東京大学出版会。
- 藤田弘夫 (2005) 「P. ゲデスと都市社会学の発展」『哲学：都市・公共・身体の歴史社会学——都市社会学誕生100年記念特集号——』三田哲学会, 114号。
- Gans, Herbert, J. (1968) *Urbanism and Suburbanism as Ways of Life*, in Sylvia Fleis Fava (ed), *Urbanism in World Perspective*, Thomas Y. Crowell Company. NY, 1968.
- Geddes, Patrick (1905) *Civics: As Applied Sociology*, James Bryce (ed), *Sociological Papers*, Macmillan. (P. ゲデス研究会訳, 2005, 「都市学——応用社会学としての試み」『哲学』前掲書。
- Geddes, Patrick (1906) *Civics: As Concrete and Applied Sociology*, James Bryce (ed), *Sociological Papers*, Macmillan. ゲデス研究会訳 (2005) 「都市学——具体性と応用社会学としての試み」『哲学』前掲書)。
- Giddens, Anthony (1984) *The Construction of Society: Outline of the Theory of Structuration*, Polity Press.
- Hall, Peter (1988) *Cities of Tomorrow*, Blackwell.
- 東島誠 (1993) 「前近代京都における公共負担構造の転換」『歴史学研究』649号。
- 広瀬和雄編 (1998) 『都市と神殿の誕生』新人物往来社。
- 岩崎信彦・鯉坂学他 (1989) 『町内会の研究』御茶の水書房。
- 伊原弘 (1998) 「新たな中国都市研究の視点をめぐって」『比較都市史研究』第17巻2号。
- 菊地勇夫 (1994) 『飢餓の社会史』校倉書房。
- 菊地勇夫 (1997) 『近世の飢餓』吉川弘文館。
- 菊池英夫 (1992) 「中国都市・聚落史研究動向と『城郷(都鄙)関係』問題についての私的展望」唐代史研究会編『中国の都市と農村』汲古書院。
- 小路田泰直 (1991) 『日本近代都市史研究序説』柏書房。
- 前川要 (1999) 「日本中世集落における短冊形地割の考古学的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第78集。
- Martindale, Don. (1958) *The Theory of the City*, in *The City by Max Weber*, The Free Press.
- Mumford, Lewis (1938) *The Culture of Cities*, Harcourt Brace Janovich., N. Y. (生田勉訳 (1974) 『都市の文化』鹿島出版会)。
- Mumford, Lewis (1961) *The City in History*, Harcourt Brace & World, Inc., N. Y. (生田勉訳 (1969) 『歴史の都市・明日の都市』新潮社)
- 内藤昌 (1994) 『復元・安土城』講談社。
- 中井信彦 (1973) 『歴史学的方法の基準』塙書店。
- 中井信彦 (1974) 「歴史学としての柳田民俗学」『伝統と現代』第28号。
- 中井信彦 (1979) 「史学としての社会史」『思想』663号。
- 中川清 (1985) 『日本の都市下層』勁草書房。
- 中川清 (2000) 『日本都市の生活変動』勁草書房。
- 永井良和 (1997) 「都市化の社会史」筒井清忠編『歴史社会学のフロンティア』人文書院。
- 中筋直哉 (2005) 『群衆の居場所——都市騒乱の歴史社会学——』新曜社。
- 成田龍一編 (1993) 『都市と民衆』吉川弘文館。
- 成田龍一編 (2003) 『近代都市空間の文化経験』岩波書店。
- 仁木宏 (1997) 『空間・公・共同体』青木書店。
- 仁藤敦史 (1999) 「古代都城の首都性」都市研究会『都市史研究』7号。
- 布川弘 (1993) 『神戸における都市「下層社会」の形成と構造』兵庫部落問題研究所
- 奥井復太郎 (1940) 『現代大都市論』有斐閣 (1985復刻版・1998著作集 大空社)
- 奥井復太郎 (1953) 「明治東京の性格(都市生活史についての覚書)」日本都市学会編 (1975) 『都市の精神』日本放送協会出版部, 『奥井復太郎著作集』第8巻, 大空社, 1988年。
- 奥井復太郎 (1959) 「荷風と東京——都市社会学から見た荷風の作品——」日本放送協会出版部 1975年, 『奥井復太郎著作集』第8巻, 大空社, 1988年。
- 大津忠彦・常木晃・西秋良宏 (1997) 『西アジアの考古学』同成社。
- 佐藤正幸 (2004) 『歴史認識の時空』知泉書館。
- 佐藤香 (2004) 『社会移動の歴史社会学——生業・職業・学校——』東洋館出版社。

- 佐藤健二編 (1996) 『都市の解読力』 勁草書房。
- 鈴木栄太郎 (1970) 『農村社会の研究』 時潮社, 『鈴木栄太郎著作集』 IV, 未来社, 1970年。
- 田中重好 (1979) 「大都市における町内会の組織化」 『大学院法学研究科論文集』 慶應義塾大学。
- 高橋勇悦 (1975) 「都市化社会の社会学——都市社会学の危機と再生——」 『社会学評論』 第25巻4号。
- 玉野和志 (1993) 『近代日本都市化と町内会』 行路社。
- 玉野和志 (2005) 『東京のローカルコミュニティある町の物語 1900-80』 東京大学出版会。
- Tilly, Charles (1978) *From Mobilization to Revolution*, Addison-Wesley Publishing Company Inc. 堀江湛監訳 (1984) 『政治変動論』 芦書房。
- Tilly, Charles and Wim P. Brockmans (1989) *Cities and the Rise of States in Europe: AD. 1000 to 1800*, Westview Press, Oxford.
- Tilly, Charles (1990) *Coercion, Capital, and European States, AD 990-1990*. Basil Blackwell, Oxford.
- Timberlake, M. & D. S. Smith (1993) *World Cities, Research in Urban Sociology*, 3.
- 若林幹夫 (1993) 『熱い都市・冷たい都市』 弘文堂。
- 若林幹夫 (2000) 『都市の比較社会学』 岩波書店。
- Weber, Max (1972) *Wirtschaft und Gesellschaft*, 5 Aufl. J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen. 5 Aufl. J.C.B. Mohr (Paul Siebeck), Tübingen. 世良晃志郎訳 (1974) 『都市の類型学』 創文社。
- Weber, Max (1924) *Wirtschaftsgeschichte: Abriss der universalen Sozial-Wirtschaftsgeschichte aus den nachgelassener Volesungen*, herausgegeben von S. Hellman und Palyi, München. (黒正巖・青山秀夫訳 (1955) 『一般社会経済史誌要論』 上・下 岩波書店)。
- Woude, AD van der, Akira Hayami, Jan de Vries (1990) *Urbanization in History: A Process of Dynamic Interactions*, Clarendon Press, Oxford.
- 柳田國男 (1969) 「田舎対都会の問題」 定本『柳田國男集』 第16巻, 筑摩書房。
- 柳田國男 (1969) 「都市と農村」 定本『柳田國男集』 第16巻, 筑摩書房。
- 柳田國男 (1970) 「地方文化建設の序説」 定本『柳田國男集』 第29巻, 筑摩書房。
- 矢崎武夫 (1962) 『日本都市の発展過程』 弘文堂。
- Yazaki, Takeo (1968) *Social Change and the City in Japan*, Japan Publishing Inc., Tokyo.
- Yazaki, Takeo (1973) *The History of Urbanization in Japan*, Aidan Southall (ed), *Urban Anthoropology*, Oxford University press.
- 吉原直樹 (1989) 『戦後改革と地域住民組織』 ミネルヴァ書房。